

参考

悪文の例

同じことばでも、それが文章に書かれることによって、話しことばと多少ともくい違ってくることは自然の傾向である。話しことばは時とともに変化してゆくが、書きことばは、変化が遅く、話しことばと歩調を共にしない。同じ口語でも、文章を書く場合に用いられる「である」という言い方は、実際の話しことばには用いられない。「である」という言い方は、尾崎紅葉が小説に用いたので、広く行われるようになった。これを広めたのは紅葉の功績であろうが、紅葉がこの言い方を始めたわけではない。中世、「にて」が合して「で」となるとともに、動詞は一般に終止形が衰えて、連体形が文の終止に用いられるに伴い、「あり」も、連体形の「ある」が優勢になった。こうして、「である」という言い方が生じたが、『蒙求抄』(柏谷注、1529年頃聞書 1534年抄)に、

小児八衛皇后ノアネテアル。(巻八)

文帝ノ子景帝ノ弟テアルト云事ヲタノンデ、(巻九)

という例があり、天草版『伊曾保物語』(柏谷注、1593年刊)にも、

人は万物の豊長であるぞ。(柏谷注、原文 fitoua banbutno reichode aruzo: 437頁19行)という例がある。室町時代にはかなり広く行われたと思われるが、この「である」はやがて、関西では「ぢゃ」と変化し、関東では「だ」となったので、江戸時代には「である」がほとんど見られなくなった。(以下 省略)

佐藤喜代治『日本文法要論』(1977年 朝倉書店) -八 話しことばと書きことば 13~14頁注:「にてあり」=「其のなかに日野の十郎はふる物にてありければ」平家物語 巻第四 宮御最後 著者にとって自明の事が、読者にとっては往々にして新情報であることに注意。

作文の例

課題「外来語に就いて」

広義では漢語も外来語であるが、ここでは西欧諸国語から入ってきた片仮名で表記される語(以下、片仮名語と称す)に就いて考察する。(前書き)

明治時代には「哲学」「主観」「野球」等外来の思想や事物を漢字に置き換えて日本語に採り入れたが、最近では原語のまま使用する傾向にあり、いきおい片仮名で表記される語が増加することになる。(本論 歴史的状況)

日本語にない概念を外国語で表すならまだしも、贈り物をプレゼント、髪型をヘアスタイルというように、わざわざ外国語を用いるのは何故であろう。片仮名語が時代の先端を行くという錯覚と共に、それを利用した商業主義の影響もあるが、その底には日本人の西洋崇拜思想がまだ尾を引いているのではないか。(本論 行き過ぎの例と分析)

外来語は外国語の学習に役立つという説がある。しかし、外来語が日本語になるとき、発音以外にも変化を生ずることがあるので注意を要する。(本論 話題の転換と提言)

変化の一つは語形の短縮である。ストライキがスト、マイクロコンピュータがマイコンの様に短縮される例は多い。これらを知らないと完全な英文を作ることは出来ない。(本論 具体例)

もう一つは意味の変化で、これは誤解を生ずる恐れがある。例えば、ナイーブという語は日本では「純真・素朴」というプラス面で用いられるが、アメリカでは「単純・粗野」というマイナス面でもとらえられるという。(本論 具体例の追加)

ライシャワー元駐日大使は、日本語の中で一番難しいのは外来語であると言ったそうである。語形の短縮と意味の変化がその最大の原因であろう。(本論 提言のまとめ)

片仮名語を一切排斥するというのは不可能であろうが、同意語があるときはなるべく日本語を使うようにしたい。また、漢字には優れた造語力があるのだから、工夫すれば片仮名語を漢字に置き換えることは多くの場合可能なはずである。美しい日本語のためにも、片仮名語の無闇な増加は控えるようにしたいと思う。(後書き)

作家の書いた4段構成の文章の好例

石地蔵の頸に縄をかけて、川の中へどぶんと漬けたり、引き上げたりして子供達が遊んでゐるところを信心家が通りかかり、何と云ふ勿体ない事をすると思つたから、子供達を叱りつけて追ひ払い、石地蔵をもとの所に安置し奉つて帰つたところが、その晩から、大熱が出た。

どう云ふわけだらうと思つて、をがんで貰ふと、お地蔵様が出て来て、折角子供達と面白く遊んでゐたのに、何故その邪魔をしたと云つて、怒られたと云ふ話を聞いたことがある。

近所に病人がある時は、家の中を静かにして、子供達を騒がせない様に気をつけるのは当然である。隣人が日本一の大事な東郷元帥であつたのだから、なほ更の事、上六小学校が唱歌の時間を取り止めたり、生徒を屋上に上げさせない様にしたと云ふ心遣ひは、私共も当然と思ふのである。

ただ病床の老提督が、急に辺りが静かになつて、長年の間聞き馴れた可愛い唱歌が聞こえなかつたり、元気のいい子供達の囀る勇ましい声が、ぱつたり止んでしまつたのを、淋しく思はなかつたか知ら、と云ふ点が少し気がかりである。

(内田百閒『百鬼園隨筆選』、「老提督」)

東郷元帥 = 東郷平八郎(1847~1934)。海軍大将。薩摩藩士出身。

日露戦争において連合艦隊司令長官として日本海海戦に勝利。

内田百閒 = 本名、内田栄造(1889~1971)。小説家、隨筆家。岡山県出身。東京帝国大学卒。

夏目漱石に師事。作品に「阿房列車」「贗作吾輩は猫である」など。

上の隨筆は「起承転結」の構成を為す4つの段落から成る。

第1段落では、地蔵を鄭重に奉った信心家はその晩から熱を出したという、意外な出来事を語る。

第2段落では、前段を承けて、地蔵の本心を明らかにし、発熱の原因を語る。

第3段落では、伝聞に基づいて書かれた前段までとは、全く内容を変えて、

東郷元帥の病気に伴い近所の小学校で様々の配慮をしたことを語る。

第4段落では、周囲の者が予想しない東郷元帥の心があるかも知れないと語り、

第1・2段落と第3段落を結び付けてこの隨筆を締め括る。

一般に一つの文章は、前の段落の内容を受けながら展開して行くものである。しかし、上の例の様に、段落の間に大きな断絶を作り、後の段落でそれらをまとめて一つの内容に作り上げるという形式も可能である。